

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 230

山津田遺跡

広域基幹河川改修事業(二級
河川前川)に伴う発掘調査

2011

岡山県教育委員会

序

総社平野をほぼ東西に流れる二級河川前川は、近年、農業用水路としての役割を担っており、流域で進められている土地改良総合整備事業にあわせて早期の改修が期待されています。

岡山県教育委員会ではこの広域基幹河川改修事業に関して、計画段階から埋蔵文化財の保護・保存について協議を重ねてまいりました。その結果、事業の実施によって影響を受ける部分についてはやむを得ず記録保存の措置を講じてきました。

調査対象となった山津田遺跡は前川の中流域にあります。近辺には全国第9位の規模を誇る全長286mの作山古墳をはじめとし、備中国分寺跡・国分尼寺跡やこうもり塚古墳など数多くの遺跡・史跡があり、吉備中枢域を形成しています。山津田遺跡はこうした吉備中枢域の一角に位置し、弥生時代から古墳時代の集落跡として知られていました。

このたびの調査においても3軒の堅穴住居を検出し、古墳時代前半を中心とする集落を確認しました。堅穴住居からは初期須恵器を模倣して作られたと見られる土師器が出土し、当地における渡来文化の広がりを考えいく上で注目できる成果をあげることができました。また、特殊器台が出土するなど貴重な成果を得られました。

本書が地域史研究の資料として、また文化財保護の一助として活用されることを期待いたします。

最後に、発掘調査の実施や報告書作成に当たりましては、岡山県備中県民局、総社市教育委員会等の関係各位、並びに地元住民の方々に御理解・御協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成23年3月

岡山県古代吉備文化財センター

所長 児 仁 井 克一

例　　言

- 1 本書は、広域基幹河川改修事業（二級河川前川）に伴い、岡山県教育委員会が備中県民局建設部の依頼を受け、岡山県古代古墳文化財センターが、平成22年度に調査を実施した山津田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 山津田遺跡は岡山県総社市上林807-1ほかに所在する。
- 3 確認調査は平成20年度に和田一剛が、全面調査は平成22年度に小鶴善邦・和田が担当した。調査面積は確認調査が19m²、全面調査が671m²である。
- 4 本書の作成は平成22年度に和田が岡山県古代古墳文化財センターにおいて実施した。
- 5 本書の執筆は島崎一束・小鶴・和田が分担し、文責は各項目あるいは遺構ごとの文末に明記した。
- 6 本書の編集は和田が担当した。
- 7 本書の作成にあたり、石材については岡山大学大学院自然科学研究科の鈴木茂之氏に鑑定・同定依頼して有益な御教示を受けた。記して厚くお礼申し上げる。
- 8 自然遺物に関する同定・分析は下記の機関に委託した。
種実同定・放射性炭素年代測定　（株）パレオ・ラボ
- 9 本書の遺構写真は調査員が撮影したが、遺物写真的撮影にあたっては江尻泰幸氏の協力と援助を得た。
- 10 本書に収載した遺構・遺物の図面・写真等は、岡山県古代古墳文化財センター（岡山県岡山市北区西花尻1325-3）に保管している。

凡　　例

- 1 本書に用いた高度値は海拔高である。
- 2 グリッド座標値は世界測地系に準拠しており、方位は平面直角座標系Vの座標北である。
- 3 報告書抄録に記載した経緯度は世界測地系に準拠している。
- 4 本書に掲載した遺構・遺物の縮尺は個々に明記してあるが、基本的には次のように統一している。

遺構

堅穴住居（1/60） 土塹（1/30） 溝（1/30）

遺物

土器（1/4） 石器・石製品（1/2・1/3）

- 5 遺構配置図などにおける遺構名は、次のとおり省略している。

堅穴住居：堅　　土塹：土

- 6 本書の押図番号、写真図版番号、表番号は、本書を通しての通番である。
- 7 遺物の掲載番号については、土器・陶磁器以外のものについては、材質にしたがって番号の前に次の略号を附した。
- 8 掲載した土器のうち中軸線の両側に白抜きのあるものは、小片のため復元絵が不確実なものである。
- 9 本書記載の遺構図中の被熱範囲に付したトーンなどは、基本的に次のとおり統一している。

被熱・焼上面



炭



壁材痕跡



- 10 土壙断面図、土器観察表などに用いた土色等は「新版 標準土色帖」を参考にした。
- 11 本書に掲載した第4図は国土地理院発行1/25,000「総社東」「倉敷」を複製し、加筆したものである。
- 12 本書で用いた時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために文化史区分、世紀を併用している。

目 次

序

例言

凡例

目次

第1章 発掘調査および報告書作成の経緯と経過.....	1
第1節 発掘調査に至る経緯.....	1
第2節 発掘調査および報告書作成の体制.....	2
第3節 発掘調査および報告書作成の経過.....	3
第2章 遺跡の位置と環境.....	5
第3章 発掘調査の成果.....	9
第1節 調査区の概要.....	9
第2節 遺構・遺物.....	12
第4章 まとめ.....	19
一覧表.....	21
図版	
報告書抄録	

図 目 次

第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000).....	1
第2図 確認調査トレントおよび 調査区配置図 (1/2,500).....	2
第3図 T 2 断面図 (1/80).....	2
第4図 周辺遺跡分布図 (1/40,000).....	7
第5図 調査地近図 (1/10,000).....	8
第6図 遺跡全休図 (1/1,500).....	9
第7図 遺構配置全体図 (1/800) ・B区遺構配置図 (1/400).....	10
第8図 調査区断面図 (1/80).....	11
第9図 壊穴住居 1 (1/60) ・出土遺物 (1/3・1/4).....	12
第10図 壊穴住居 2 (1/30・1/60).....	13
第11図 壊穴住居 2 出土遺物 (1/4).....	14
第12図 壊穴住居 3 (1/30・1/60) ・出土遺物① (1/4).....	15
第13図 壊穴住居 3 出土遺物② (1/4).....	16
第14図 土壙 1 (1/30).....	16
第15図 土壙 2 (1/30).....	16
第16図 溝 1 (1/30).....	17
第17図 包含層・その他の遺物① (1/4).....	17
第18図 包含層・その他の遺物② (1/4).....	18
第19図 包含層・その他の遺物③ (1/2・1/3・1/4).....	18
第20図 山津田遺跡時期別遺構配置図 (1/1,000).....	20

図版目次

図版1	1 洪水区全景（北西から）	2 上塙1（東から）
	2 洪水地近景（南西から）	3 C区中央付近発掘（北から）
図版2	1 B区全景（南から）	4 上塙2（南東から）
	2 壓穴住居1（北から）	5 池1（北東から）
図版3	1 壓穴住居2・3（南東から）	図版5 壓穴住居2出土土器（6～11）、壓穴住居3出土土器（17～42）
	2 壓穴住居2（西から）	図版6 壓穴住居1出土遺物（1、S1）、壓穴住居3出土土器（19、25）、包含層その他の土遺物（65～77、S2）
	3 壓穴住居3（西から）	
	4 壓穴住居3 壁材痕跡①（西から）	
	5 壓穴住居3 壁材痕跡②（北西から）	
図版4	1 壓穴住居3 上塙（南から）	

写真目次

写真1 現場公開実施状況（南から）……… 3 | 写真2 壓穴住居2調査風景（北から）……… 13

表目次

表1 文化財保護法に基づく提出書類一覧	4	表4 溝一覧表	21
表2 壓穴住居一覧表	21	表5 土器一覧表	21
表3 土壌一覧表	21	表6 石製品一覧表	22

第1章 発掘調査および報告書作成の経緯と経過

第1節 発掘調査に至る経緯

前川は、総社市山手大字西郡宇植の尻地内に源を発し、北流の後三須丘陵北辺を沿いながらやがて東流して岡山市二手で足守川に合流する。

前川の河川改修計画は、昭和63年以降岡山県土木部河川課・岡山県食糧地方振興局建設部（現岡山県農林水産局建設部）によって進められてきた。また、予定地内の埋蔵文化財については岡山県教育庁文化課（現文化財課）との協議のなかで対策が講じられ、平成元年以降は確認調査や発掘調査が総社市蘆木の蘆木漁師遺跡で実施してきた。

その後、文化財課は平成16年度になって総社市上林から江崎にかけての予定工事区間の埋蔵文化財の取り扱いを検討するため、倉敷地方振興局建設部と協議を再開した。これにより事業対象地について文化財課は局と現地踏査を実施し、遺跡との位置関係を確認することとなった。踏査の結果、対象地内は三須高田遺跡・三須河原遺跡・美濃田遺跡に隣接し、山津田遺跡の範囲内に含まれることが判明した。しかし、このうち二須畠山遺跡・三須河原遺跡・美濃田遺跡については、いずれもが対象地が遺跡の外縁であったり、旧河道域であったりしたことから事業の進行に合わせて随時立ち会い調査を実施することで対応することとなった。立ち会い調査は、文化財課が平成16年11月～19年度まで実施した。

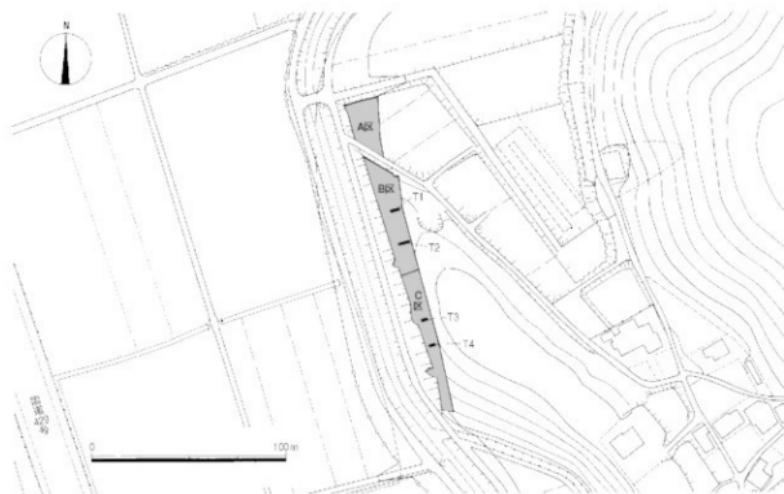
一方、平成20年度以降の工事区間に存在する山津田遺跡については、昭和57年度に総社市江崎地区国場整備事業とともに総社市教育委員会によって調査され、弥生時代前期から古墳時代の集落跡の存在が判明した調査範囲に隣接することなどから、改めて確認調査をふまえて検討することとした。

確認調査は、平成20年11月10日～20日まで工事対象となる丘陵斜面にT1からT4の計4本の調査区を設定して実施した。

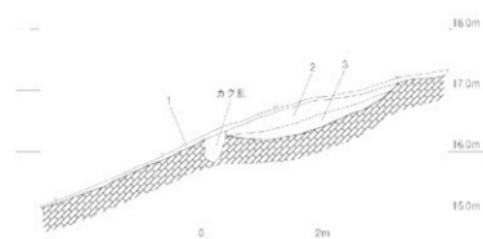
調査の結果、いずれの調査区でも表土層直下で地山層に達した。ところが、T2においてはその地山層を切り込む状況で古墳時代中期のものと思われる遺構を検出した。この遺構は、最大幅2.9m・深さ約50cmを測り、埋土中からは古墳時代の土師器・埴輪片が出土した。狭い範囲の調査であるうえ西側半分については後世の開墾等により元地形が著しく損なわれていたことから断定はできないが、溝あるいは上縁の一部である可能性が考えられた。また、この遺構からは弥生土器・特殊器台等も出土しており、近辺に弥生時代の遺跡の広がりが想定された。また、



第1図 遺跡位置図(1/1,500,000)



第2図 確認調査トレーニチ及び調査区配置図 (1/2,500)



- 1 棕灰色 (10YR5/1) 上(表土)
- 2 棕灰色 (10YR4/1) + (赤平…大噴出物一品包含)
- 3 黄褐色 (10YR5/2) 土(六糞灰、希土…古時代二層包含)

第3図 T2断面図 (1/80)

T1、T3、T4では遺構の確認はできなかったが、T3では弥生土器が出土しており、近辺に同時期の遺構の広がる可能性が考えられた。

こうした成果を基に文化財課と備中県民局は協議を行い、平成22年度にはその範囲内で発掘調査を実施、記録保存の措置を執ることになった。

(島崎・和山)

第2節 発掘調査および報告書作成の体制

平成20年度

岡山県教育委員会

教育長

岡山県教育庁

教育次長

門野八洲雄

岡野 健一

文化財課

課長

二村 修

参考事

木山 調郎

参考事

田村 啓介

総括副参考事(埋蔵文化財班長)光永 真一

主 任	小鶴 善邦	文化財課	
上 事	平井 利尚	課 長	山村 啓介
岡山県古代吉備文化財センター		参 事	光永 真一
所 長	藤川 洋二	総括副参事（埋蔵文化財班長）	宇垣 匠雅
次 長（総務課長事務取扱）	小林 勝	主 任	米田 克彦
参 事	岡田 博	主 事	一色 武
<総務課>		岡山県古代吉備文化財センター	
総括副参事（総務班長）	若林 一志	所 長	児仁井克一
主 任	福池 光修	次 長（総務課長事務取扱）	片山 浩司
上 任	中島 忍	参 事	中野 雅美
<調査第一課>		<総務課>	
課 長	中野 雅美	総括副参事（総務班長）	上田 利弘
総括副参事（第一班長）	宇垣 匠雅	主 任	植木寿美子
主 任	渡邊恵里子	主 任	越野 忍
主 事	和田 剛	主 任	行守 智和
	(確認調査担当)	<調査第二課>	
平成22年度		課 長	島崎 東
岡山県教育委員会		総括主幹（第一班長）	渡邊恵里子
教 育 長	門野八洲雄	主 任	小鶴 善邦
岡山県教育庁			(調査担当)
教 育 次 長	増本 好孝	主 任	和田 剛
			(調査・報告書担当)

第3節 発掘調査および報告書作成の経過

(1) 発掘調査の経過

平成22年4月から調査員2名により発掘調査を開始した。排土工程の都合から、調査区の北側をA区、市道を挟んで調査区中央をB区、調査区南側をC区とし、調査を進めることとした。調査は事前の確認調査を実施することのできなかったA区部分を合わせた、遺跡全体の広がりと内容を再確認するため、各調査区でのトレンド調査から開始した。その結果、A区については近年のほ場整備により地形の変化を受けていることが明らかとなった。また、C区北側の谷部分も畑の開墾によると思われる地形の変化が顕著であり、遺跡の広がりは確認できなかった。一方、B区とC区の丘陵上で弥生土器や土師器が出上し、遺跡の広がりを想定できた。こうした成果からB区とC区の南側を合わせた671m²について重点的に調査を実施することとなった。B区・C区とも表土除去後に遺構の検出と掘り下げを行い、随時作図・写真撮影等の記録化を進めた。また、調査終盤にさしかかった6月16日には空中写真撮影を実施している。なお、6月3・4日の両日には現場公開を実施し、約90名の参加をみた。



写真1 現場公開実施状況（南から）

(2) 報告書作成の経過

平成22年7月から発掘調査担当者のうち1名が岡山県古代吉備文化財センターにおいて報告書作成のための修理作業を開始した。作業は出土遺物の洗浄および注記から開始し、その後、上器の復元・実測・写真撮影を行った。遺物の実測作業は調査員の指示のもとで整理作業員が主に担当したが、浄書はすべて調査員が担当した。遺物の内、炭化物については(株)パレオ・ラボに、石材については岡山大学の鈴木茂之氏に分析・鑑定を依頼した。また、遺構の図面整理、下図の作成と浄書は調査員が行い、造構及び遺物の説明について調査担当者が執筆した。

(和田)

(3) 日誌抄

平成20年度

11月10日(月) 確認調査開始

11月20日(木) 確認調査終了

平成22年度

4月1日(木) 発掘調査準備

4月12日(月) 調査機材搬入

4月13日(火) 発掘調査開始

4月14日(水) 測量用杭設置

4月23日(金) B区調査開始

5月27日(木) C区調査開始

6月3日(月) ~ 4日(火) 現場公開

6月16日(水) ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影

6月23日(水) 現地調査終了

6月30日(水) 発掘調査終了

7月1日(火) 報告書作成作業開始

8月2日(月) 炭化物分析を(株)パレオ・ラボに依頼

9月30日(木) 報告書作成作業終了

表1 文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財確認調査の報告

番号	文書番号	件名	種類および名前	所在地	面積(m ²)	原店	包蔵地の有無	報告書	担当者	期日
1	民古通 第71号 H20.11.26	周知	集落赤山津井遺跡	總社市上野807-1ほか	19	河川改修	有	岡山県古代吉備文化財センター長 伊川洋二	和田	H20.11.10 ～H20.11.20

埋蔵文化財発掘の通知(旧法第57条の3)

番号	文書番号	種類および名前	所在地	面積(m ²)	目的	通知者	期間	動作事項
1	民古通 第907号 H16.11.9	集落赤山津井遺跡	總社市上野965-2から 上野121	4,080	河川改修	岡山県埋蔵地県民局長	H16.11.30 ～H17.3.31	二段立会

埋蔵文化財発掘調査の報告(法第99条)

番号	文書番号	件名	所在地	面積(m ²)	原店	報告書	監工書	施設	
1	民古通 第4号 H22.4.12	周知	集落赤山津井遺跡	總社市上野807-1ほか	1,000	河川改修	岡山県古代吉備文化財センター長 伊川洋二	小磯善司・和田	H22.4.12 ～H22.6.30

埋蔵文化財発見の通知(法第100条第2項)

番号	文書番号	物件名	出土場所	出土年月日	発見者	土地所有者	取扱管理者
1	民文埋 第1601号 H20.3.31	上野・埴輪 瓦蓋板等1等	總社市上野807-1ほか 山田津井遺跡	H20.11.10 ～H20.11.20	岡山県教育委員会 教育長 門野八重樹	個人	岡山県古代吉備文化財センター
2	民文埋 第374号 H22.6.23	土器・長持・罐 石製品等 土器・瓦蓋板等 6等地	總社市上野807-1ほか 山田津井遺跡	H22.4.12 ～H22.6.23	岡山県教育委員会 教育長 門野八重樹	司日高知事 石川正弘	岡山県古代吉備文化財センター

第2章 遺跡の位置と環境

今回調査対象となった山津田遺跡は総社平野南部に広がる三須丘陵上に所在する。総社平野は岡山県南西部に位置し、その範囲は東西約8km、南北約4.8kmに及ぶ。現在の行政区画で言えば総社市の東部（旧山手村、旧清音村を含む）から岡山市西部にまで広がっている。

総社平野の北側には経山や鬼城山など、標高400m級の比較的急峻な山塊が横たわっており、これらは吉備高原の南縁にある。一方、平野南部は福山や仕手倉山など300~200m程度の山塊により倉敷地域との境を画されている。これら山塊の大半は白亜紀の花崗岩とその風化土からなる。山津田遺跡の所在する三須丘陵も同様の傾向にあるが、丘陵東側では閃緑岩も分布している。他には鬼城山近辺で新生代の砂礫層、旧山手村の鞋部山近辺で古生代の地層の存在が知られている。

これら山塊と丘陵に挟まれた総社平野は、古高梁川の東分流と古足守川の沖積作用により形成されたものである。古高梁川は現在の総社市井尻野近辺で分岐していた。ここから東へと向きを変えつつ総社平野東半を創の日のように流れ、現在の岡山市北区三手近辺で古足守川と合流する。その後、南へと向きを変え、その終着地である「吉備の穴の海」と注いでいたと考えられている。現在の前川はこうした古高梁川の一部であったと見られ、その流域には大小の自然堤防と、その後背渕地が形成されていた。縄文時代後期以来の集落はこうした自然堤防上に形成され、その立地は現在でも農村集落のそれに引き継がれている。

一方、現在三須丘陵上やその西にある三輪山山麓、あるいは山裾に見られる段丘上には広葉樹と針葉樹の混合林が広がっているほか、一部で果樹園や畠作地としての利用が見られる。しかし、かつてはこうした丘陵上や段丘上にも居住地が広がり、多数の古墳が築かれていた。

この総社平野に生きた人々の足跡は旧石器時代に遡り、宝福寺裏山遺跡では宮田山タイプに似たナイフ形石器が採集されている。続く縄文時代前半の遺跡としては、押形文土器の出土した長瀬遺跡や長良山遺跡が知られている。しかし、その分布は散発的と言え、この地で定住したと考えられる状況ではない。総社平野での人々の活動が活発化するのは縄文時代後期からである。この時期には南溝手遺跡出土の刃根上器が示すように、生業変化の起こっていた可能性が高い。山津田遺跡近辺の井手見延遺跡でも縄文時代後期の遺物が出土しており、人々が平野部へ本格的な進出を果たしていた様子が窺える。ところで、窪木遺跡や三輪・三軒屋遺跡では朝鮮半島の影響を受けた丹塗磨研上器が出土している。稻作の導入期にこうした遠隔地との交流を示す遺物の見られることは、当時の社会状況を考える上で興味深い。

続く弥生時代前期～中期中葉にかけて、南溝手遺跡で集落の継続が認められる他、鎌戸原遺跡で前期前半の土器、山津田遺跡では前期後半の堅穴住居が見つかっており、山裾や丘陵上への集落の展開を確認できる。続く中期後半になると遺跡数が一挙に増加する。前述の南溝手遺跡でこの時期の集落が知られる他、三須畠田遺跡や大溝遺跡ではこの時期から集落形成が始まっている。続く後期になると真壁遺跡で遺構の数が急増することが知られており、拠点的な集落形成の進んでいたことがわかる。こうした集落規模の拡大に合わせるようにして、丘陵上で墳墓が形成され始める。前山遺跡や猪物師谷遺跡で集団墓が営まれる他、宮山遺跡では特殊器台を作り前方後円形の墳丘墓が出現する。一方、

山津田遺跡でも特殊器台が出土しており、近辺に同時期の墳墓の存在する可能性が高い。

古墳時代前期の古墳としては山津田遺跡の西にある三輪山丘陵上において、天望台古墳や三笠山古墳などの前方後円墳の存在が知られている。これらは全長55~70mを測り、前期の前方後円墳としては中形の部類に属する。これら前方後円墳の近辺には殿山・岩屋古墳群など古墳時代前期の小墳群が展開しており、前方後円墳の被葬者がそれらを束ねるような位置にあることを指摘できる。一方、この時期の集落としては井手天原遺跡や真懐遺跡、窪木遺跡が知られており、山津田遺跡でも前期初頭の堅穴住居が見つかっている。ただ、その規模はいずれも10軒未満であり、足守川流域の津寺遺跡で見られるような、大規模な集住は見られない。

その後、古墳時代中期になると造山古墳に統いて作山古墳という古備を代表する巨大な前方後円墳が出現する。統いて小造山古墳や宿寺山古墳など全長100mを超す大形の前方後円墳が相次いで築かれる。この時期には三須丘陵上でも法蓮古墳群や雲上山古墳群など、木棺直葬や箱式石棺を内部主体とする小規模な古墳群が全面的に展開するようになる。ところで、造山古墳築造に並行する古墳時代中期前半の集落としては高塚遺跡や窪木墓跡遺跡が知られており、いずれも陶質土器・初期須恵器が出土している。總社平野北の山裾にある奥ヶ谷窯跡は、この時期の初期須恵器窯として知られる。また、高塚遺跡や法蓮37号墳では上部器の形態を呈しながら須恵質に焼かれた高杯、あるいは須恵器の形態をとりながら焼成は土師質である甕など、いわゆる「模倣」土器が出現している。これらは窯窓導入期において土師器・須恵器の製作・焼成技法が密接に影響し合う関係にあったことを示す。こうした関係性成立の背景に、先述の大形前方後円墳群の築造のあったことは想像に難くない。

やがて古墳時代後期に入ると總社平野での前方後円墳築造は下火となる。後期後半になると緑山古墳群などで横穴式石室の本格的な採用が見られる。やがて古備三大山古墳の一つとして知られるこうもり塚古墳と、それに続くとされる江崎古墳という2基の前方後円墳が築かれるが、これらを最後に前方後円墳の癡造は終焉を迎える。この時期、古備では鉄鉱石を材料とした製鉄が開始され、千引かなくる谷遺跡はその嚆矢となるものである。また、窪木樂師遺跡は鍛冶専業の集落であるとされる。

律令制下の山津田遺跡は備中國御園郡御園（三須）郷に含まれ、遺跡南側の平野には古代山陽道が所在していたとされる。古代山陽道は備中國分寺と備中國分尼寺の南を東西へ走っていたと見られているが、国道429号に伴う調査でもその位置は確認されていない。また、三須河原遺跡は「郡城」の墨書き土器の存在から、8世紀代の窪屋都衙に比定されている。その西側に隣接する三須庵寺はこれに伴うものであると考えられている。平安時代には總社平野南西部の福山山塊で福山寺や浅原寺などの山上寺院が建立された。

統く鎌倉時代には「備中國賀陽郡服部郷岡」が示すような土地所有関係の整理・統合が進んだものと見られる。三須今溝遺跡では現在も山津田遺跡近辺で見られる条里溝の起源が、この時期にまで遡ることが確認されている。南北朝時代には福山城を巡る攻防戦により、福山寺や備中國分寺が灰燼に帰した。室町時代に備中の守護となつたのは幕府の脅領を務めた細川氏であるが、実際に領国經營にあたっていたのは草山城に居を構える石川氏であった。応仁の乱を契機に細川氏の勢力が弱まると、石川氏は新たに台頭した備中松山の三村氏衆となりた。しかし、三村氏は宇喜多氏との抗争に敗れてその勢力を失い、中国地方を統一した毛利氏により滅ぼされる。その後、備中高松城を巡る攻防が織田・羽柴（豊臣）氏優勢に終わる、結果として總社平野は豊臣氏傘下である宇喜多氏の支配するところとなつた。近年の国道180号バイパス建設に伴い、備中高松城に籠城した有力国人である因府市



- | | | | | | |
|----------|------------|----------------|----------|-----------|----------|
| 1 山津道跡 | 2 三須今濟遺跡 | 3 美濃日進跡 | 4 天満遺跡 | 5 三須中块賀遺跡 | 6 三須河原遺跡 |
| 7 三須高丘遺跡 | 8 八出村武内跡 | 9 井古天原・今才戸天神遺跡 | 10 鶴毛遺跡 | 11 高源寺遺跡 | 12 桧木走跡 |
| 13 大文字遺跡 | 14 雄大萬泥遺跡 | 15 伊川見北遺跡 | 16 貞觀遺跡 | 17 高涼遺跡 | 18 宮山墳墓群 |
| 19 前山遺跡 | 20 天照山古墳 | 21 三笠山古墳 | 22 鹿山古墳群 | 23 鹿山古墳 | 24 鹿山古墳 |
| 25 小佐山古墳 | 26 雷寺山古墳 | 27 雷山古墳群 | 28 遠邇古墳群 | 29 江道古墳 | 30 錦山古墳群 |
| 31 鳥ヶ谷遺跡 | 32 伊牛木分尼寺跡 | 33 伊牛木分尼寺跡 | 34 三須廻寺 | 35 賀夜美寺 | 36 錦ヶ原遺跡 |
| 37 長塚口遺跡 | 38 稲山城跡 | 39 稲山城跡 | 40 渡守遺跡 | | |

第4図 周辺遺跡分布図 (1/40,000)

正の居館と見られる遺構が調査されている。

関ヶ原の戦いを経て、宇喜多氏・毛利氏の除封の後、総社平野は岡山藩・備中松山藩・足守藩・岡田藩・浅尾藩・旗本領に細かく分割されて統治をうけた。この内、浅尾藩を舞台にして起きた長州第二奇兵隊による焼き討ち事件は、幕末期の争乱の一つとしてよく知られている。

廢藩置県とその後の行政区域の整理統合を経て、明治8年には現在の岡山県が成立した。あわせて山津田遺跡の所在する上林付近は岡山県瀬戸郡三須村となったが、明治33年には郡の再編に伴い都窪郡に属することとなった。さらに昭和29年には吉備郡総社町との合併の上、現在の総社市へと編入された。現在、山津田遺跡近辺は古備路風土記の丘県立自然公園の一部となり、県内外から多くの観光客を受け入れる観光拠点となっている。また、遺跡近辺では農地の土地区画整理が進み、岡山県を支える穀倉地帯としての役割を担っている。
(和田)

<主要参考文献>

- 総社市史編さん委員会編『総社市史 考古資料編』 総社市 1988
- 総社市史編さん委員会編『総社市氏 通史編』 総社市 1998
- 亀山行進「地理的・歴史的環境」[岡山県埋蔵文化財発掘調査報告] 156 岡山県教育委員会 2001
- 葛原克人「第一章 山手の夜明け」「山手村史 木編」 山手村 2004
- 武田泰彰「歴史的・地理的環境」[総社市埋蔵文化財発掘調査報告] 121 総社市教育委員会 2010
- 平井典子「水田開発とムラ作り」「図説 倉敷・総社の歴史」郷土出版社 2009
- 光野千春・沼野忠之・高橋達郎「解説」「岡山の地学」 山陽新聞社 1982
- [岡山県埋蔵文化財発掘調査報告] 47・65・100・115・156・198・209・211 岡山県教育委員会 1982・1987・1995・1997・2006・2007・2008
- 『総社市埋蔵文化財調査年報』1~19 総社市教育委員会 1991~2010



1. 山津田遺跡 2. 作田古墳 3. 東山古墳 4. 御中里分字

第5図 調査地近辺図 (1/10,000)

第3章 発掘調査の成果

第1節 調査区の概要

山津田遺跡は総社市上林807-1ほかの標高20mほどの低丘陵、通称「坊主山」上に位置する。この丘陵は岡山市北区新庄上から総社市上林まで南北約2km、東西約3kmにわたって広がる三須丘陵の市西端にあたる。本遺跡は昭和57年度に総社市教育委員会により実施されたは場整備に伴う発掘調査成果により、丘陵上に広がる弥生時代前期～古墳時代にかけての集落跡として周知されていた。

さて、今回の調査地は前川に沿って延びる南北約170m、東西約10m程の細長い純面である。調査地は北西と西へ延びる二つの丘陵およびその間の谷・斜面からなっている。調査は農道を挟んで延びる丘陵端部をA区、中央部分の丘陵上から谷部にかけてをB区、西へ延びる丘陵とそれを扶む斜面をC区として進めた（第6・7図）。

調査地は調査前には雑木林であったが、昭和50年代後半に行われたは場整備以前は畑作地として利用されていた。調査を進めると、各地点において表土直下で耕作土が確認され、耕作による開墾の範囲はB区およびC区丘陵上だけでなく、谷部まで広がっていたことが明らかとなった（第8図）。

一方、A区はは場整備による地形改変が著しく、現代耕作直下で化岩岩の岩盤に達した。耕作土中からは近世～近現代の陶磁器片がわずかに出土したのみであった。また、この地点は昭和57年度に実施された調査地点の隣接地であるが、その際の検査面と比べて1.5m以上地下げされていた。これらを総合的に勘案して、遺跡はA区へは広がっていないと判断した。

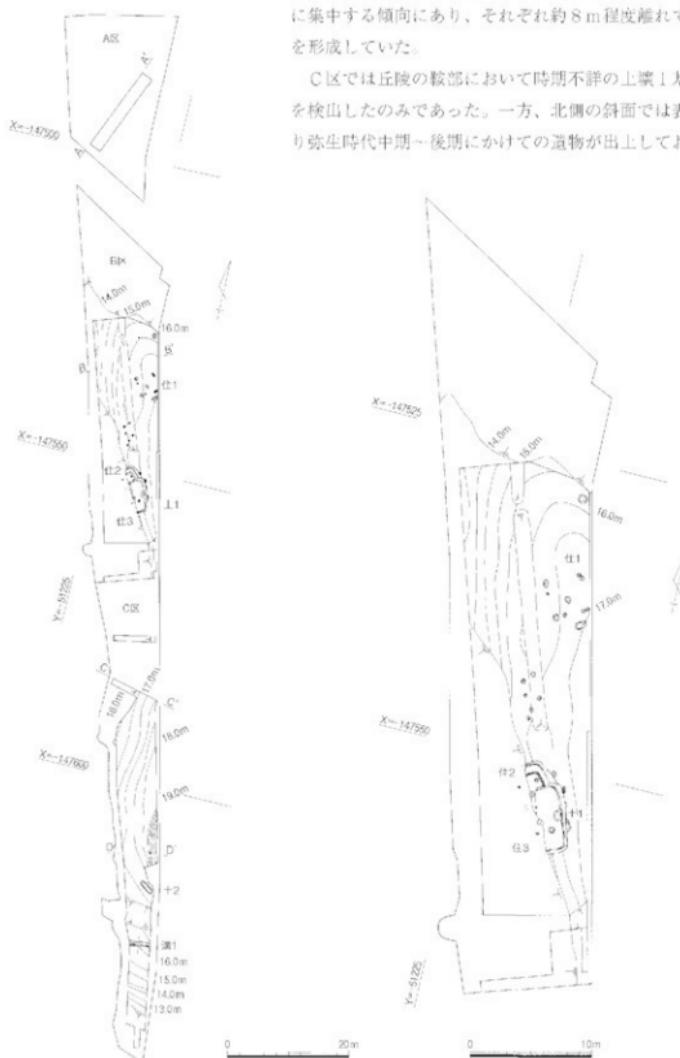
B区は確認調査で遺構の見つかった地点を含んでおり、トレンチ調査でも遺物の出土を見たことから遺跡の広がりを想定できた。調査を進めると元地形が大きく改変さ



第6図 遺跡全体図 (1/1,500)

れているものの、調査区北側において柱穴のみが残存していた古墳時代前期の堅穴住居を1軒、中央付近で時期不詳の柱穴6基を検出した。一方、南側では重複した古墳時代前期と中期の堅穴住居、土壙1基、柱穴4基を確認している。遺構は標高16~17m附近に集中する傾向にあり、それぞれ約8m程度離れてグループを形成していた。

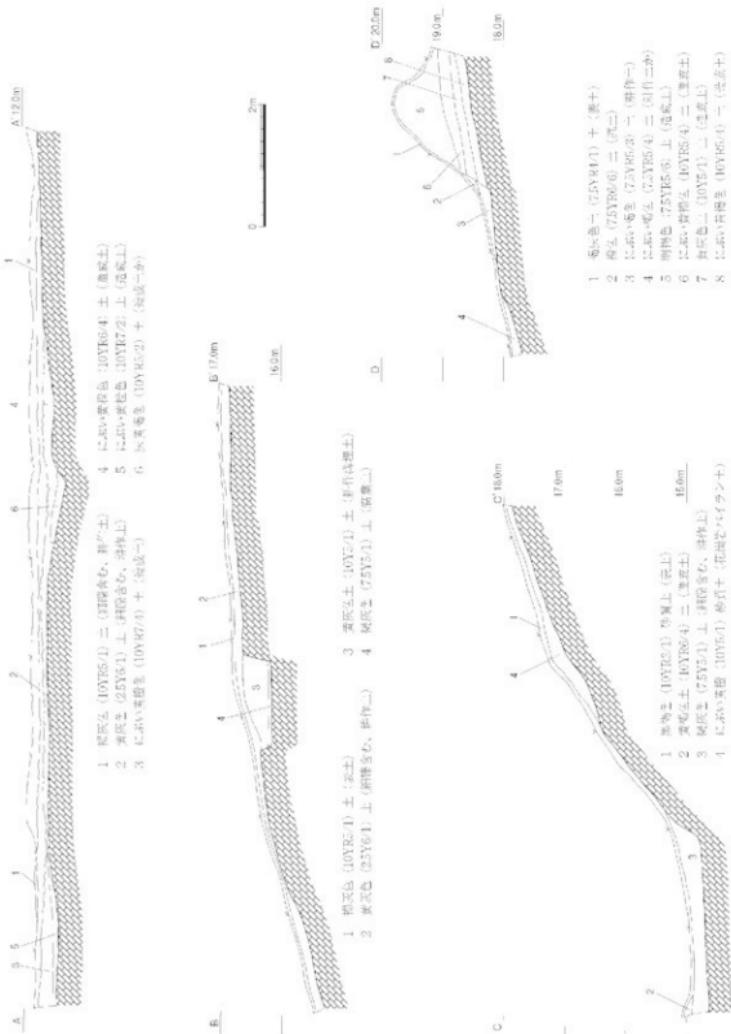
C区では丘陵の鞍部において時期不詳の土壙1基と溝1条を検出したのみであった。一方、北側の斜面では表土直下より弥生時代中期~後期にかけての遺物が出土しており、南側



第7図 遺構配置全体図(1/800)・B区遺構配置図(1/400)

の斜面では埴輪片が出土した。これらから調査範囲外の丘陵頂部にも遺構・古墳の存在する可能性が高い。なお、調査地東側の丘陵頂部は昭和30年代後半には競馬場として利用されていた。位置関係から、C区中央の丘陵上にある土壘状の高まりはこれに伴うものと見られる。

(和田)



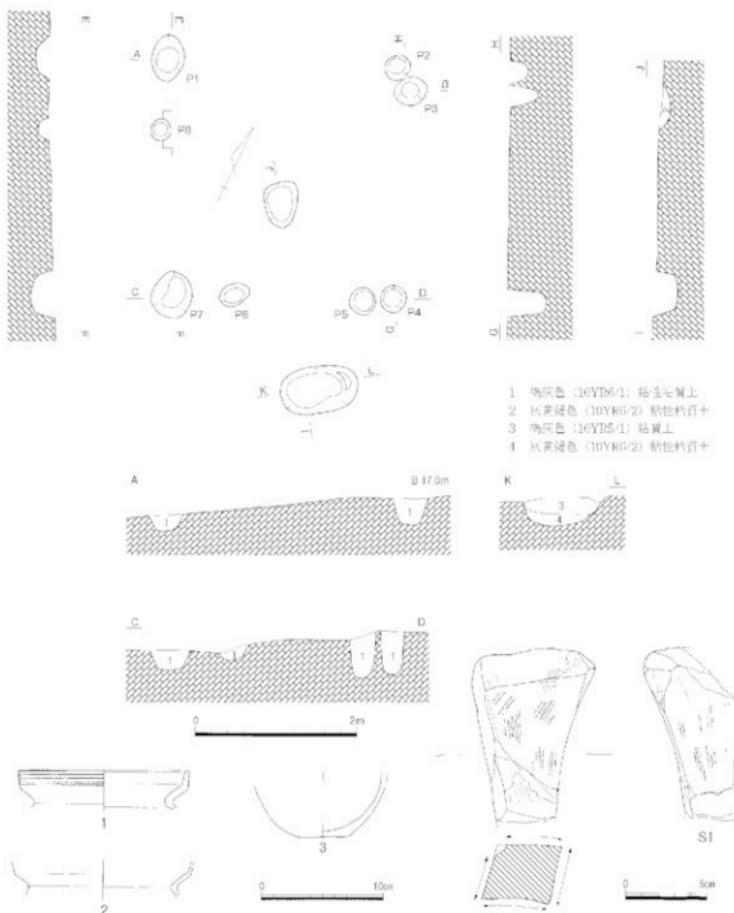
第8図 調査区断面図 (180)

第2節 遺構・遺物

1 壊穴住居

壊穴住居1（第9図、図版2）

B区丘陵上で検出された壊穴住居である。床面まで大きく削平されていたため、地山直上で柱穴と



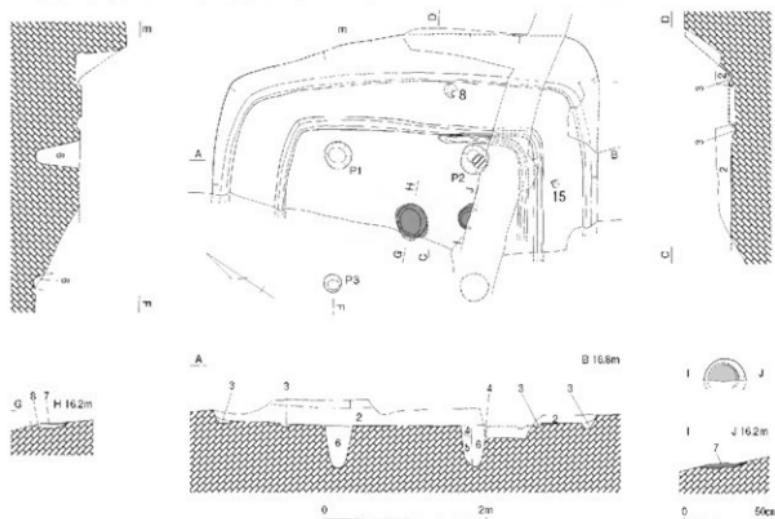
第9図 壊穴住居1 (1/60)・出土遺物 (1/3・1/4)

土壇等を検出できたにとどまる。全部で8基の柱穴を検出しているが、P1、P2あるいはP3、P4、P5の4本から構成される4本柱の住居であると考える。住居中央で中央土壇であると考えられる深さ12cmの浅い凹みを検出している。また、住居南側では深さ40cmを測る楕円形の土壇を検出したが、これは位置関係より住居に伴う方形土壇である公算が大きい。この土壇の埋上中より臺1や砥石S1が出土したほか、径3cm程の円礫が散見された。住居床面の敷石であったもの一部が、埋没過程において流入したものと見られる。住居の時期は出土遺物から古墳時代前期初頭である。(和田) 積穴住居2(第10図、第11図、図版3、写真2)

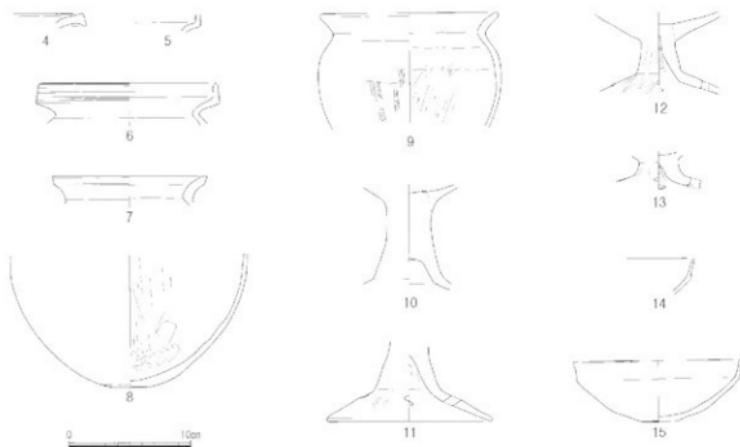
B区南側の丘陵鞍部から斜面にかけて位置する、最大で長軸1.72mを測る方形の住居である。南北半分は竪穴住居3と重複している上、西半分を流出しているため残存状況は悪かったが、壁際では深さ60cmを測った。床面には幅40~50cm、中央部との比高5~10cmを測る高床部が見られ、高床部の外周に沿って幅12cmほどの壁体溝を検出した。高床部と中央部境の溝は一部二重になっており、床面に1回の改変がなされたと見られる。中央部で3基の柱穴を検出しているが、位置関係から4本柱の住居となるであろう。なお、P2で確



写真2 積穴住居2調査風景(北から)



第10図 積穴住居2 (1/30・1/60)



第11図 竪穴住居2出土遺物 (1/4)

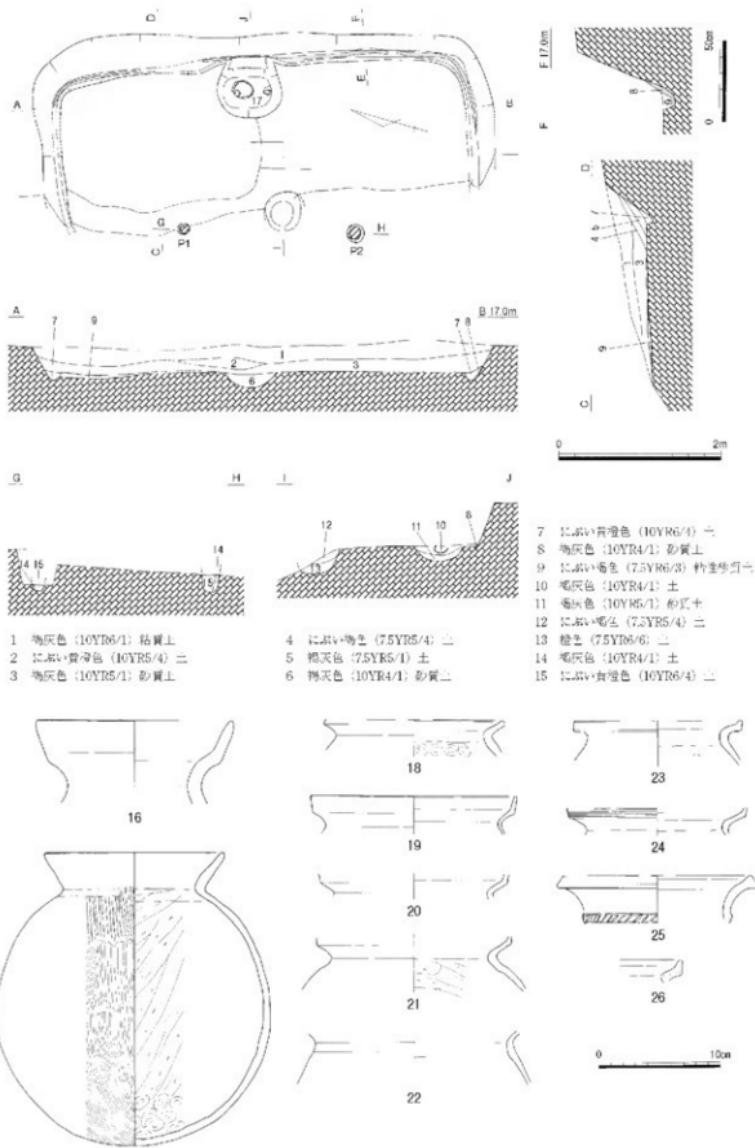
認された柱痕跡は径18cmを測った。また、住居中央で椿円形の中央土壇とその南東40cmの位置で径36cmほどの焼土面を検出しておらず、どちらも炭層により覆われていた。焼土面の焼きしまりは甘く、表面が赤く変色した程度であった。時期は出土遺物から古墳時代前期初頭である。

なお、中央土壇を覆う炭層のC14分析の結果、 1817 ± 16 BPの曆年較正年代が得られた。(和田)
竪穴住居3(第12図、第13図、図版3、図版4)

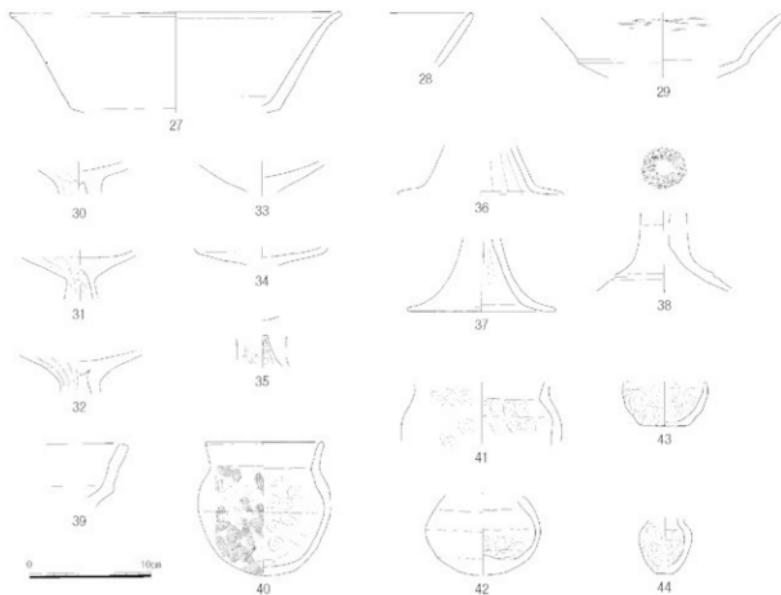
B区南側の地山直下において検出した、長軸5.66mを測る方形の住居である。同住居は竪穴住居2と土壇1を切っている。西半分を流出しているものの東半分については残りがよく、海拔16.8mの検山面からの深さは最大で約50cmを測る。竪穴住居2と重なる部分の床面が低くなってしまっており、実線で示した範囲内を9層で盛ってかさ上げしている状況が見られた。床面では深さ28cmを測る中央穴と、その中央穴を挟むように2本の柱穴が検出された。柱間距離は2.1mを測った。なお、両者とも径18cm程度の柱痕跡が見られた。また、住居の東壁際において、長幅79cm、短軸60cmを測る土壇を検出している。埋土上には炭や焼土が多数見られ、上層から壺17が出土している。一方、住居の壇際は沿って壁体溝を検出している。壁体溝は地山に似た7層により、壇際に向かってやや盛り上げられつつ埋没していた。また、壁体溝の内部で住居壁に接するようにして堆積する幅5cmの褐色土層(8層)を確認している。この土層は壇際に接する地山状況や色調から、住居壁材の痕跡であると考えられた。なお、壁材の単位、あるいは壁材を固定するための杭やその痕跡は見られなかった。

出土遺物は上部器の壺、甕、高杯や小形丸底壺など多種にわたる。このうち注目できるのは高杯38である。これは高塚遺跡や青生小学校裏山遺跡の出土例と同様、須恵器系の技術により製作された模倣高杯である。出土遺物には古墳時代前期前半と中期のものが混在しているものの、前者の大半は埋土上層からの出土であり、混入であると考える。よって、この住居の時期は古墳時代中期前半である。

なお、床面直上で検出した炭化材のC14分析の結果、 1770 ± 17 BPの曆年較正年代が得られた。(和田)



第12図 坂穴住居3 (1/30・1/60)・出土遺物① (1/4)

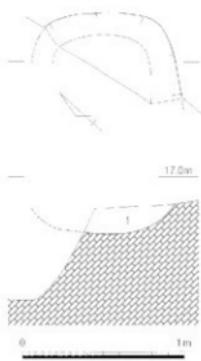


第13図 壇穴住居3出土遺物② (1/4)

2 土壌

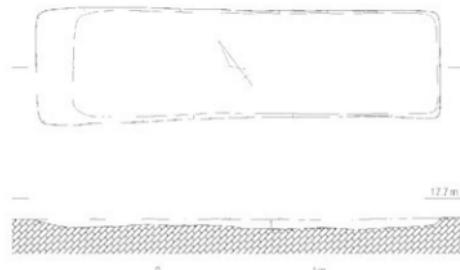
土壤1 (第14図、図版4)

B区南側において、壇穴住居3に切られる状況で検出された土壌



1 灰黄褐色 (10YR5/2) 沈積土

第14図 土壌1 (1/30)



1 灰黄褐色 (10YR5/2) 沈積土

第15図 土壌2 (1/30)

である。しまりの強い灰黄褐色土層で埋まっていた。この遺構の時期は、図示できなかったものの土師器の小片が出土していることと、切り合ひ関係から古墳時代前半である。
(和田)

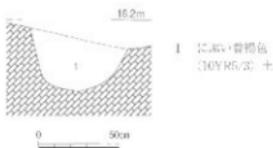
土壙2 (第15図、図版4)

C区の中央部、上壙状の高まり西端部に位置している。この地点は現代の畑地により大規模に削平を受けているため、検出された深さはわずか7cmと非常に浅い。形態から土壤幕の可能性も否定できないが、性格は不明である。遺物は弥生土器小片が出土している。
(小鶴)

3 溝

溝1 (第16図、図版4)

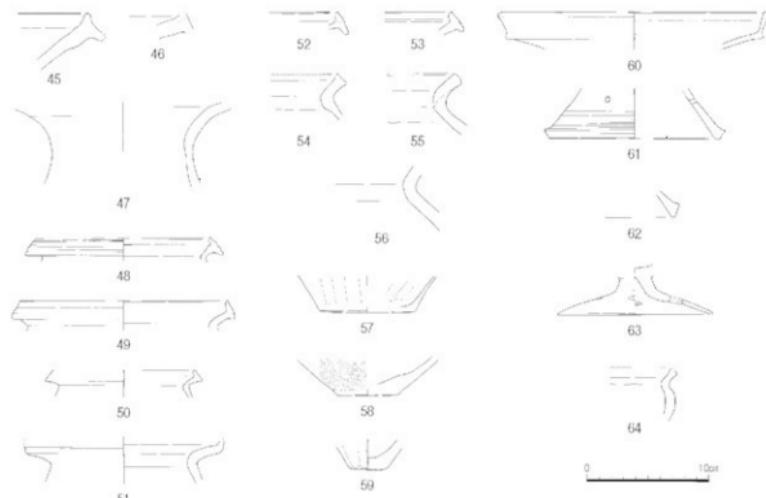
C区の丘陵鞍部から斜面地への傾斜変換点付近で検出された、東西方向に掘削されている溝である。溝底には東から西へと下がる3段の階段状のテラス面と、流水に起因すると思われる抉れが検出された。溝底東端と西端の比高差は約60cmである。遺物が出土していないため、時期は不明である。
(小鶴)



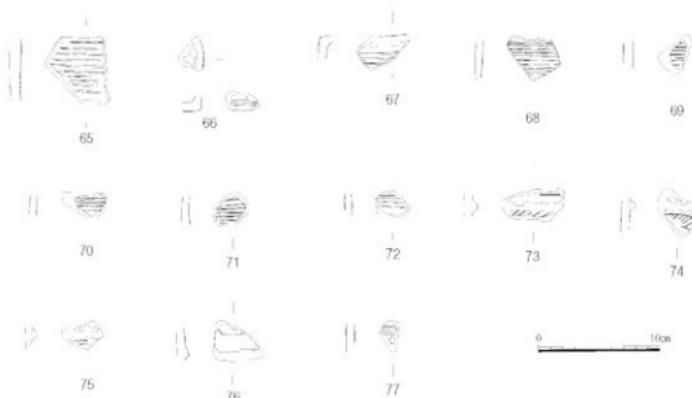
第16図 溝1 (1/30)

4 包含層・その他の遺物

調査区の各地点から遺構に伴わない状況で各種遺物が出土している。特に第17図に示した弥生土器の量が多く、その時期は弥生時代中期末～後期末に及ぶ。甕52や高杯60、61など中期末と考えられる遺物群はC区北側の丘陵斜面で多く出土する傾向にあった。第18図に図示したのは特殊器台片である。

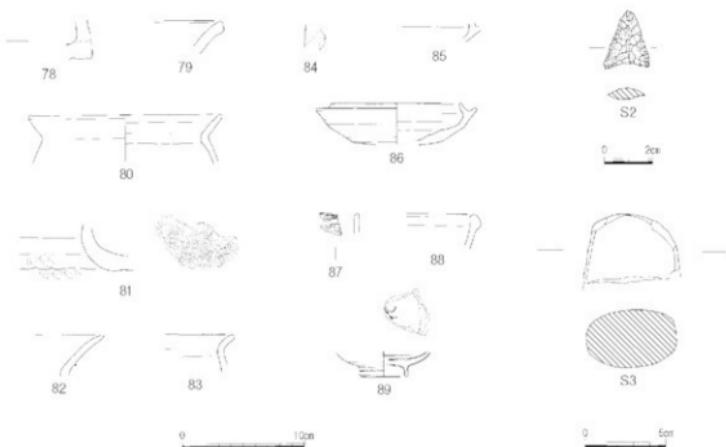


第17図 包含層・その他の遺物① (1/4)



第18図 包含層・その他の遺物② (1/4)

小片が多いものの、形態や器壁の厚さなどから65～67は口縁部、68～72が間帯、73～77までが文様帶であると見られる。口縁、間帯の外面には平行沈線が描かれ、内面には横方向のケズリの痕跡が見られる。また、文様帶には斜め方向の沈線の描かれたものと、S字形連続渦文の一部と見られるもの、平行沈線を描くものの3者が見られる。S字形連続渦文の内部は斜め方向沈線が描かれ、渦文内部が沈線により分割されている。こうした文様構成は新見市西江遺跡出土例に近い。その他の遺物として、円筒埴輪片84や須恵器杯身86、△区出土の陶磁器片、石器では石鏃S2や石斧S3がある。(和田)



第19図 包含層・その他の遺物③ (1/2・1/3・1/4)

第4章　まとめ

今回の山津田遺跡の調査では主に古墳時代前半を中心とする集落の広がりが明らかとなった。ここでは総社市教育委員会調査分⁽¹⁾を合わせて、山津田遺跡全体の遺構変遷について既述する。

弥生時代

今回の調査地点には弥生時代の遺構は存在しない。一方、総社市教育委員会の調査した遺跡北西側では弥生時代前期後葉と後期後葉の住居がそれぞれ1軒ずつ検出されている。ところで、竪穴住居3の埋土中より出土した特殊器台の文様構成は宇垣雅美的言う向木見Ⅱ型⁽²⁾にあたると考える。こうした評価は先の総社市教育委員会による調査で出土した資料の評価を追認するものである。ただし、いずれも細片であることや時期の大きく異なる還暦の埋土中から出土したことから、ある程度の距離を転落してきたものと考える。これらから丘陵頂部付近に後期末葉の墳墓の存在する可能性が高いと言える。

古墳時代前期

今回の調査では古墳時代前期の竪穴住居を2軒検出している。総社市教育委員会の調査でも竪穴住居2軒、および段状遺構がこの時期とされ、この時期が山津田遺跡の最盛期であったと考える。さて、今回調査した竪穴住居2から出土した高杯や甌、鉢などはその特徴から高橋謙のX-a期⁽³⁾、または下田所式⁽⁴⁾に該当する。一方、総社市教育委員会により調査された2軒の竪穴住居と段状遺構から出土した上部器は、その特徴から下田所式に比定されている。しかし、改めてその内容を検討すると、高杯脚部や小形丸底壺の形態から下田所式よりもやや新しく位置づけられる資料が散見される。よって、これら住居群が一時期に集落を形成したわけではなく、数軒の住居が場所を変えながら営まれていたと考えるのが妥当である。また、調査範囲内には古墳時代前期末に比定される遺構は存在せず、集落は縮小傾向にあったことを指摘できる。

ところで、この遺跡から前川・足守川を約6.5km下った地点に位置する津寺遺跡は、この時期の大規模拠点集落として知られている。そこから足守川、前川に沿うように展開する三須畠田遺跡や井手天原遺跡でも小規模ながら同時期の集落が見つかっている。そして、いずれの遺跡の竪穴住居数も古墳時代前期内にピークを迎えた後、その後に減少傾向へ転じたことがわかっている。今回の調査成果より、山津田遺跡も同様の傾向にあることがわかった。これらから、前川・足守川流域の集落群がその規模に関係なく消長を同じくしていることがわかり、集落群の有機的な結びつきを想定できる。

古墳時代中期

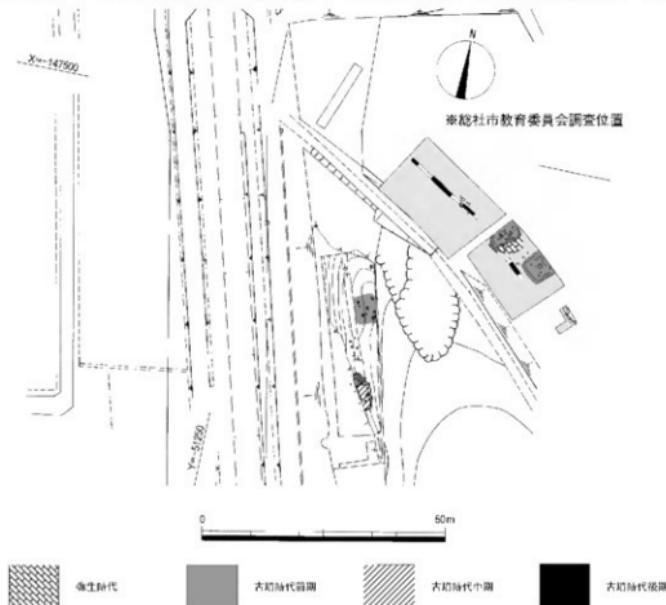
古墳時代中期に該当する遺構は今回調査した竪穴住居3のみで、集落は前期から引き続いて縮小傾向にある。この住居の時期は透孔のない脚壺が低平になった高杯脚や、大形で深い杯部を持つ高杯27、初期須恵器模倣高杯38、口縁部の退化した小形丸底壺40などから高橋謙のI-a期、高塚遺跡のI-a～Ⅲ類⁽⁵⁾の時期、須恵器で言えばおおむねT-K73型式⁽⁶⁾に併行するものと考える。特に初期須恵器模倣高杯の出土は注目でき、山津田遺跡近辺では法蓮37号墳で須恵器・上部器の両技法で製作された高杯の出土したことが知られている。こうした特徴的な土器群について、その分布や特徴から中野雅美は造山・作山古墳周辺での生産を指摘している⁽⁷⁾。また、高塚遺跡ではこの時期にカマドを

有し、平面長方形の特徴的な住居が出現しており、渡来系集団との関わりが指摘されている。一方、今回検出した住居は前期以来の方形土塹を伴う在地的なものである。山津田遺跡のような在地的集団においても、こうした初期須恵器模倣高杯を入手している点は重要であり、その背景に造山・作山古墳の築造を契機とした、出自の異なる集団を包摂する原理の出現を読み取ることができるのではないかと考える。なお、この堅穴住居3を最後にして、山津田遺跡は居住地としては放棄されたようである。これは、真向かいの作山古墳の築造とその後の政治情勢に関連すると思われるが、時期的な問題を含め詳細は検討課題である。

このまとめの作成にあたり、資料実見について総社市教育委員会の村上幸雄・平井典子の両氏より格別の配慮を得た。記して感謝いたします。
(和山)

註

- (1) 総社市教育委員会調査地点はほ場整備に伴う地形変更により、その特定が困難であった。そのため、市道との位置関係から推測されたおおよその位置であることを付記しておく。
- (2) 宇垣国雅「10 特殊器台・特殊壺」『吉備の考古学的研究(上)』山陽新聞社 1992
- (3) 高橋 譲「3 中国・四国」「古墳時代の研究」第6巻 土師器と須恵器 雄山閣出版株式会社 1991
- (4) 柳瀬昭彦「V 紹語」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」16 1977
- (5) 梁田英樹「5 古墳時代中期の土器」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」150 岡山県教育委員会 2000
- (6) 田辺昭二「須恵器大成」角川書店 1981
- (7) 中野雅美「4 山陽」「古墳時代の研究」第6巻 土師器と須恵器 雄山閣出版株式会社 1991



第20図 山津田遺跡時期別構造配置図 (1/1,000)

表2 堪穴住居一覧表

遺構名	旧遺構名	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	四隅積 (cm)	柱元 (木)	半徒歩 (m)	長×幅 (cm)	深さ (cm)	方木半周 (mm)	幅×高 (mm)	傾上 (度)	壁厚 (mm)	床高 (mm)	門戸
堪穴住居1	No1堪穴住居	方	472	(270)	(10.0)	3(確定)	木床	(42)×36	6	90	36	35	○	○	古墳前期
堪穴住居2	No2A堪穴住居	方	566	(240)	(11.0)	2		(50)×(41)	28	79	60	15	○	○	古墳中期
堪穴住居3	No2B堪穴住居	方													古墳中期

表3 土壌一覧表

遺構名	旧遺構名	平面形	初期段	最終 (cm)	鉢輪 (cm)	縁輪 (cm)	底面高 (mm)	持続	層	号
土壌1	No3土壤	球形	成形	(55)	(56)	19	16.64	古墳		
土壌2	No4土壤	球形	丸形	249	21	7	17.51			

表4 溝一覧表

遺構名	旧遺構名	断面形	二重幅 (cm)	底面幅 (cm)	深さ (cm)	持続	層	号
溝1	No5溝	複合形	70	37	35			

表5 土器一覧表

品番	出土 場所	出土 遺物	断面	口径	底径	高さ	形状	持続	底	次 想	考察・手法の特徴など
1	II区 堪穴2号1	土壌内	土器部	妻	13.8	(32)	直好	口幅約14mm	内:ナギ、ハラクズリ 外:ナギ、鉄錆沈銀		
2	B区 堪穴2号1	土壌内	土器部	妻		(29)	直好	口幅約14mm	内:ナギ	妻式	
3	B区 堪穴2号1	土壌内	土器部	弧	14	(53)	直好	口幅約15mm-前部 底好	内:ナギorヘウミガキ ナギアザ?		
4	B区 堪穴2号2	土壌内	土器部	直		(12)	直好	口幅約14mm	内:外:ナギ		
5	III区 堪穴4号2	下層	土器部	妻		(50)	直好	口幅約14mm	内:ナギ 外:ナギ、鉄錆沈銀4枚		
6	B区 堪穴2号2	下層	土器部	妻	14.4	(33)	直好	口幅約13mm	内:ナギ 外:ナギ、鉄錆沈銀4枚		
7	B区 堪穴2号2	上層	土器部	妻	12.6	(13)	直好	口幅約11mm	内:ナギ	ナギ	
8	B区 堪穴2号2	上層	土器部	直	3.6	(10.8)	直好	口幅約8mm	内:ナギ	ナギ	
9	III区 堪穴4号2	土器部	妻	14.4	(9.5)	直好	口幅約14mm-側面1/4	内:ナギ、ハラクズリ 外:ボルト			
10	B区 堪穴2号2	上層	土器部	直杯		(8.6)	直好	口幅約8mm	内:ナギ	妻式	
11	B区 堪穴2号2	上層	土器部	直杯	13.4	(6.6)	直好	口幅約8mm	内:シボリ、ハラクズリ		
12	B区 堪穴2号2	上層	土器部	直杯		(6.8)	直好	口幅約8mm-前部	内:ナギ 外:ナギ、ハラクズリ		
13	III区 堪穴4号2	中央直上	土器部	直杯		(3.2)	直好	口幅約8mm	内:ナギ 外:ナギ	空孔式	
14	III区 堪穴4号2	中央直上	土器部	直杯		(2.9)	直好	口幅約8mm-後部	内:ナギ	空孔式	
15	B区 堪穴2号2	裏面	土器部	斜	(13.7)	28	50	直好	口幅約14mm-底部1/4	内:外:妻式	
16	B区 堪穴2号3	土壌内	土器部	直	(15.9)	(6.8)	直好	口幅約18mm	西:ナギア?、ナギ、直セサニ? 外:ナギ?		
17	III区 堪穴2号3	土壌内	土器部	妻	14.5	24.0	直好	口幅約18mm-骨質1/2	内:ナギ、ハラクズリ、鉄錆沈銀 外:異種		
18	III区 堪穴2号3	土壌内	土器部	妻	(14.8)	(2.6)	直好	口幅約18mm	内:ナギ	直セサニ	
19	B区 堪穴2号3	土器部	妻		(16.7)	(3.1)	直好	口幅約18mm	内:外:ナギ、直セサニ		
20	B区 堪穴2号3	土器部	直		(2.2)	直好	口幅約18mm	内:ナギ	ナギ		
21	III区 堪穴2号3	板面	土器部	妻		(4.6)	直好	口幅約18mm	内:ナギ、直セサニ		
22	III区 堪穴2号3	板面	土器部	直		(4.7)	直好	口幅約18mm	内:ナギ	直セサニ	
23	B区 堪穴2号3	板面	土器部	妻		(13.6)	(3.7)	直好	口幅約18mm	内:ナギ、ナギ、ハラクズリ? 外:ナギ	
24	B区 堪穴2号3	板面	土器部	直		(2.2)	直好	口幅約16mm	内:ナギ	直セサニ? 西:ナギ	
25	B区 堪穴2号3	板面	土器部	直		(15.4)	直好	口幅約18mm以下	内:ナギ 外:ナギ	直セサニ? 西:ナギ	
26	III区 堪穴2号3	板面	土器部	直		(2.0)	直好	口幅約18mm	内:ナギ	直セサニ	
27	B区 堪穴2号3	1層	土器部	直杯	26.3	(3.2)	直好	口幅約14mm	内:ナギ	直セサニ	
28	B区 堪穴2号3	3層	土器部	直杯		(4.4)	直好	口幅約18mm	内:ナギ	直セサニ	
29	B区 堪穴2号3	3層	土器部	直杯		(5.2)	直好	口幅約18mm-底部1/6	内:ナギ 外:ナギ		
30	III区 堪穴2号3	中央直上	土器部	直杯		(3.1)	直好	口幅約18mm-肩部部	内:ナギ	ナギ	
31	B区 堪穴2号3	板面	土器部	直杯		(4.0)	直好	底体積約1/6	内:ナギ 外:工ヌナヂ		
32	B区 堪穴2号3	板面直上	土器部	直杯		(3.5)	直好	底体積約1/6	内:ナギ 外:ナギ 外:ナギ		
33	B区 堪穴2号3	土器部	直杯			(2.9)	直好	底体積約1/6	内:ナギ	直セサニ	
34	III区 堪穴2号3	土器部	直杯			(1.5)	直好	口幅約14mm	内:ナギ	直セサニ	
35	B区 堪穴2号3	土器部	直杯			(4.2)	直好	口幅約14mm	内:ナギナヂ? 外:ナギ?		
36	B区 堪穴2号3	土器部	直杯		(13.6)	(4.0)	直好	口幅約14mm	内:エヌナヂ? 外:ナギ?		
37	B区 堪穴2号3	土器部	直杯			(11.9)	(5.1)	直好	口幅約14mm	内:ハラクズリ? 外:ナギorヘウミガタ	



1 調査区全景（北西から）



2 調査地近景（南西から）

図版2



1 B区全景（南から）



2 竪穴住居 1（北から）



1 竪穴住居2・3（南東から）



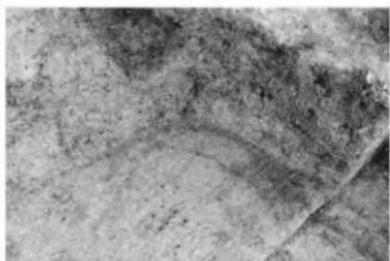
2 竪穴住居2（西から）



3 竪穴住居3（西から）

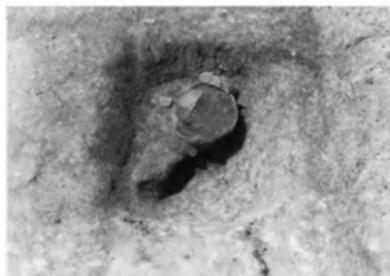


4 竪穴住居3 壁材痕跡①（西から）



5 竪穴住居3 壁材痕跡②（北西から）

図版4



1 竪穴住居3 土壙（南から）



2 土壙1（東から）



3 C区中央付近完掘（北から）



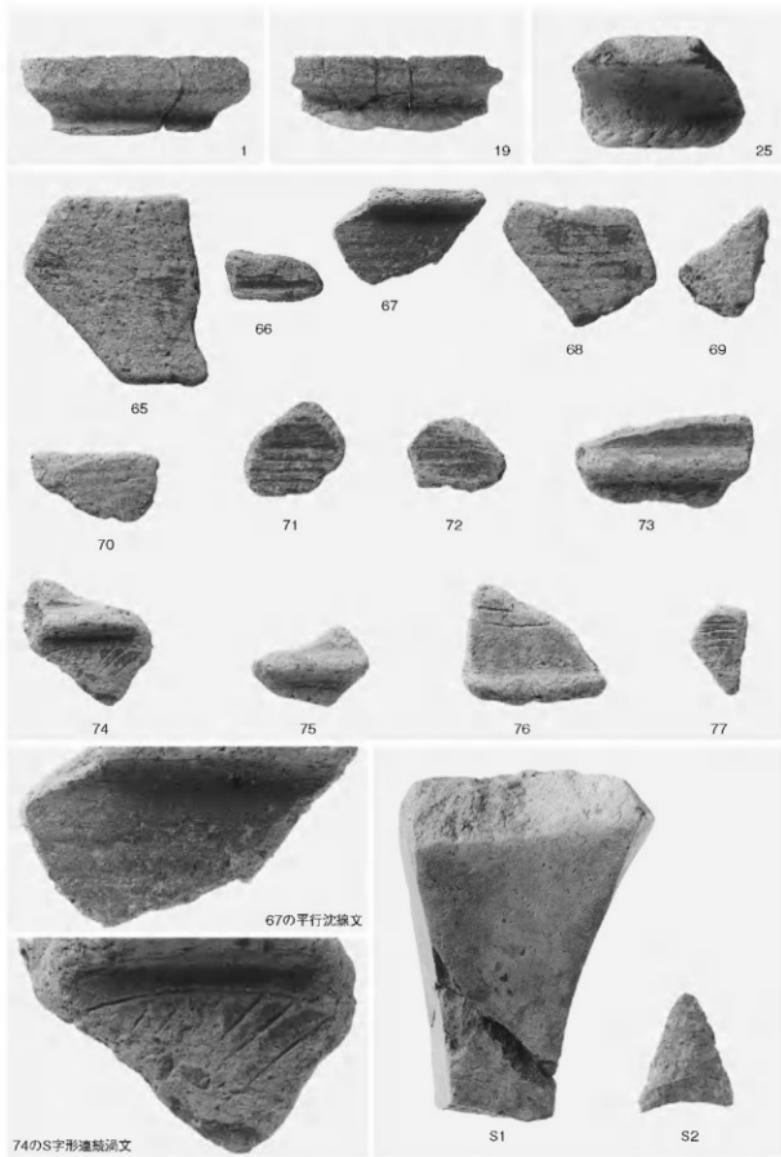
4 土壙2（南東から）



5 溝1（北東から）



図版6



74のS字形彫痕渦文

竪穴住居1出土遺物(1、S1)・竪穴住居3出土土器(19、25)・包含層・その他の出土遺物(65~77、S2)

報告書抄録

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告230

山津田遺跡

広域基幹河川改修事業（二級
河川前川）に伴う発掘調査

平成23年3月11日 印刷
平成23年3月31日 発行

編 集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山市北区西花尻1325-3

発 行 岡山県教育委員会
岡山市北区内山下2-4-6

印 刷 旭総合印刷株式会社
岡山市北区内山下2 10 3